《報告》第7期ネットワーク委員企画講座　2015.2.26/10：00～12：00　　ウェーブ411学習室

変わる保育所～子育て体験が生んだアイディア～

保育所での事件や事故をなんとかできないかとの思いから「見える化が大事」と、日本初WEBカメラを取り入れた保育所を設立した木田さんを講師に迎えました。後半は参加者を中心に「保活カフェ」を開催しました。

講師:木田聖子さん（株式会社チャイルドハート代表取締役）
幼稚園教諭、保育士、専業主婦を経て、1992年幼児教室設立。
2000年保育サロンを媒体としたベンチャー企業を立ち上げ、阪神間を中心に事業展開。
2015年2月、地域の優れた技術やビジネスモデルをたたえる「関西財界セミナー賞　女性賞」受賞。

【講演】

日本は第一子出産後に6割の女性が離職している現状からも子育てしにくい国だということがわかります。

私も子どもを保育所に預けましたが、母親に「こんなことまでして働かなければいけないの」と非難されました。

自分の人生をいきいき生きるため、仕事のキャリアもあきらめたくないという女性は多くなってきました。しかし、「自分のキャリアのため」に子どもを保育園に預けることに罪悪感をもつ女性は少なくありません。当時も今も女性が働きにくい状況であることに変わりはないのです。

幸福度世界一のデンマークの育児環境をみると、「17歳までの子どものいる家庭に3ヵ月ごとに4万から6万4000円支給、18歳以上の学生に月8万円の支援金」。税金は高いのですが、「教育、医療、介護が無料」なので将来の不安はなく、自殺率は日本の約半分です。労働時間が短く、待機児童なし。女性の多くは働いており、25歳から34歳の労働率は、日本67%に対し81%と先進国の中でもトップレベルです。

私は、地域で子育てを支援する仕組み、女性が働きやすい環境のための仕組みを作ることを目的に起業しました。これからも、目的実現のために働き続けようと思います。

【参加者との質疑応答】

Q1 園内で子ども同士のトラブルにはどう対処していますか?

A1 すぐに私に連絡が入ることになっています。一度目は、双方の親にこんなことがありましたと報告し、もう一度同じことがあったときは、謝罪のお手紙を書いてもらうこともあります。

Q2 病児保育を利用したいのですが。

A2 市によってちがいますが、西宮市には「病児保育、病後児保育」があります。事前に登録が必要ですので、保育所事業課または病児保育ルームへ登録申請書を提出してください。

利用は、前日までに病状や予約状況などを病児保育ルームに問い合わせ、利用が可能かを確認のうえ予約してください。診察を受けて医師連絡票に病状を書いてもらってからの利用になります。
（保育所事業課35−3164／つぼみの子保育園　病児保育ルーム66−6673）

Q3 木田さんは保護者の電話に24時間対応するそうですが、仕事のモチベーションを保つ秘訣を教えてください。

A3 仕事が大好きなんですね。24時間対応していますが、お電話をいただいたことはありません。

Q4 子どもがうるさい、保育所がうるさいという苦情が問題になっていますが。

A4 地域の児童館にさえ苦情があるそうです。ですが、子どもは社会の宝です。地域の中でみんなが育てていかなければならないと思います。堂々と子育てをしましょう。

Q5 小規模保育所は園庭がないので、保育の環境としては不安なのですが。

A5 毎日お散歩に行くなど工夫をしています。園選びのポイントは、保育の内容をしっかり見せてくれること、子どもの表情がいきいきして、保育士たちが笑顔で働いていることです。

Q6 保育所に関する不安や意見はどう伝えたらいいでしょうか。

A6 保育士とコミュニケーションをよくとって、不安なこと、相談したいことはどんどん伝えて一緒に子育てしてください。また、保育所には市の保健師が月1回まわっています。市の保育所事業課に言ってくだされば、きちんと指導が入ります。保護者の意見を生かし改善されるためにも、ぜひご意見を寄せてください。

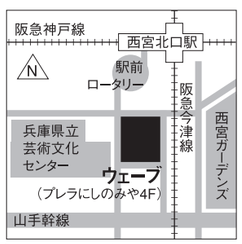
編集後記

○女性は結婚すると、出生、育児という大仕事が待っている。それに費やす労力は大変のものだ。配偶者はその一部分でも肩代わりすべきと思うがどうだろうか。（内田）○育児雑誌って、びっくりするほど沢山種類があるんですね!　私はあんまり読まないで育児してたなぁと反省しつつ、いいかげんが、いい加減かな?!　色んな方との出会いに感謝☆（佐藤）○春です。3才の長男の服装に頭を悩ませる毎日。おしゃれ服ではなく、毎日保育所に着て行ける服選びが難しい。ボタンは自分で着脱できずNG。さあどうしよう?（智恵蔵）

■ネットワーク委員：西宮市男女共同参画センター　ウェーブを拠点に市民参画の事業を推進することを目的に公募で選ばれた市民（任期2年）。現在の第7期委員は情報誌の編集・発行、講座企画、運営をしている。■ウェーブ（WAVE）の意味：「男女がともに行動し、活気に満ちた平等社会をめざす」ことを意味する言葉（With/Act/Vitality/Equality）の頭文字と、男女共同参画社会の実現に向けて大きな波（うねり）をつくっていこう、という思いがこめられています。

ウェーブは、男女共同参画社会の実現をめざす施設です。性別、年齢、国籍にかかわらず、ご利用いただけます。
開館時間　1月4日～12月28日　9：00～22：00
受付時間　月～土曜日（年末年始、休日除く）9：00～17：15

WAVE PRESS　Vol.17
●発行日　2015年3月31日
●編集・発行
西宮市男女共同参画センター　ウェーブネットワーク委員会
〒663-8204　西宮市高松町4番8号 プレラにしのみや4階
Tel. 0798-64-9495　Fax. 0798-64-9496
●http://www.nishi.or.jp/navi/ln_0009600000.html



市民がつくる、市民のための、男女共同参画社会をめざす情報誌「ウェーブ プレス」
WAVE PRESS
2015 MARCH Vol. 17

育児雑誌は面白い!?

＜母の友＞

福音館書店／545円／毎月発行／1953年創刊

おしゃれ雑誌が苦手だったが「あ、この絵知ってる」とジャケ買いした、古風な名前の雑誌。絵本にも似た小さなつくりは手に取りやすく、「ぐりとぐら」「魔女の宅急便」など、良質な児童書を生みだした。ところどころにある写真や言葉が、ふっと子ども時代を思い出させてくれる。子育てを通して、もう一度子ども時代をやり直すことができると気付かせてもくれた。子どもの自分と大人の自分を行ったり来たりしてみたい方へ。

＜孫の力＞

木楽舎／905円／奇数月発行／2011年創刊

育児のノウハウというよりも、如何にして“孫”と楽しむかを追求した雑誌。どんな力やねん!　とツッコミたくなるが、創刊準備号の表紙を見て納得。「祖父母と孫がつながる新雑誌」と銘打つ。しかし、こう「孫」「孫」とくると少しウンザリ。と思っていたら、15号からは「死ぬまでマンガ。」「ねこを抱いて死にたい。」と表紙も特集も一変。最新の22号は「一生、労働者で行こう。」とがんばる。でも、あくまで“孫愛”は底辺に流れている。

＜FQ　JAPAN＞

アクセスインターナショナル／500円／季刊／2006年創刊

「男の育児バイブルFrom　UK」と銘打つ。表紙にはジョニー・デップ、ブラッド・ピットとセレブ俳優が多く、「できる男」の雑誌というにおいがプンプン。誌面には、ブランドのベビーカーやおもちゃなどモノが多く、できる父親の持ち物はかくあるべしと購買意欲をそそる。「子ども・子育て支援新制度」などの記事もあるが、省庁の広報的内容で物足りない。ユニークな企画「父子旅」も、ハワイで乗馬やバーベキューと庶民には手が届かない。ただ、数少ない男性向け育児雑誌だけに発行は続けてほしい。

みんなこんなにうまく子育てしているんですか？

※片付いた部屋、可愛い洋服を着た子どもとおしゃれな母親。出産後も仕事をしっかりこなし、共働き。外ではバリバリ働き、家に帰ればイクメンに変身する夫。こだわりのマイホームで暖かい日差しを受ける、キラキラの理想の家族が雑誌の中で微笑む。みんなこんなにうまく子育てしているんですよと言わんばかりに。

※でも現実は、みんな必死でもがいて悩んでいる。インターネットやSNSが普及して、初めての育児でも手軽にほしい情報は手に入るし、簡単に人ともつながることができる。それでも、動かない文字と写真の力は確かにあり、だからこそ多くの人が育児雑誌を手にしている。

※近年にぎやかなのが、おしゃれな母親のためのファッションもライフスタイルも楽しむ育児雑誌だ。以前は、子育て中は、自分のことは後回しに我慢していた女性が多かったが、日常を謳歌する母親自身のための雑誌。

※対する男性向けの育児雑誌は、「イクメン」という言葉の普及とともに数多く創刊されたが、今では縮小されている。

育児雑誌、つくり手のこだわり

＜ 京都子連れパワーアップ情報 ＞

子育てで困っていることを解消したい

丸橋泰子さん（NPO 法人「おふぃすパワーアップ」代表）

京都を拠点に雑誌「京都子連れパワーアップ情報」を発行する丸橋さん。創刊は24年前。子育て真っ最中に雑誌を立ち上げ、以来、募集で集まった育児中の女性たちが編集にあたるというスタイルを貫き、子育ての現場で必要とされる情報を発信し続けている。

「育児に追われるだけの毎日がつらかった。ずっと家にいるとイライラが募るし、外に出て自分の自由になるお金を稼ぎたいという気持ちもあった」と創刊当時を振り返る丸橋さん。二人の子どもを育てながら託児付きの編集講座に参加し、お出かけ情報たっぷりの情報誌「京都子連れパワーアップ情報」を作り上げた。「第1号は1991年発行。当時は、子連れで行くと嫌がられるレストランが多かったから、自分たちで行ける場所を探して特集した」

子育てで困っていることを解消したい―。これが雑誌編集の大きな動機の一つ。

年1回発行の雑誌「京都　幼稚園・保育園情報」には、園の選び方に悩む母親の思いがぎっしり詰まっている。「子連れパワーアップ情報」と同様、毎回、取材・編集講座を開催して育児中の女性を募集し、原稿の書き方などのノウハウを伝えながら、雑誌を完成させていく。育児中の女性による、育児中の女性のための雑誌づくりというスタイルは、ずっと変わらない。「京都は私立園が多いという地域事情もあり、幼稚園を選ぶのは本当に難しい。実は自分で取材して、現場も見て、情報を得るのが最も確かな方法だと思う」

編集スタッフにアトピーに悩むメンバーがいたことから、食を考える特集を組んだこともある。また、思春期の子育てをテーマにメンバー募集をしたら、全員が不登校の子がいる親で、「不登校ガイドブック」という冊子につながったことも。まだ「イクメン」という言葉がない時代から、いち早く育児をする男性を誌面で取り上げ、現在はフリーペーパー「京都イクメン図鑑」も発行している。

「子どもには、社会で働く母親の姿を見せて、育てた方がいい。ずっと家に一緒にいると、子どもを監視するようなことになりかねない」という思いから、育児中の女性の再就職にも法人として積極的に携わる。最近は「子育てを深く考えると、医療にも行き着くという思いから、小児科医、産婦人科医の取材にも力を入れている」という。人との出会い、取材現場での出会いが、次々と新しいテーマへとつながっているようだ。

＜ Luca ＞

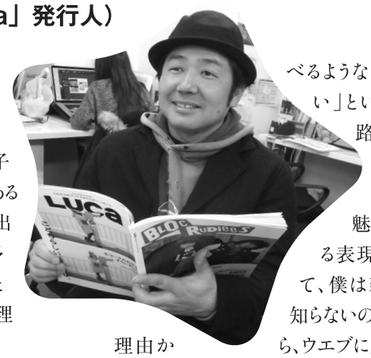
こだわりの子ども服 その面白さを伝えたい

磯本啓さん（雑誌「Luca」発行人）

雑誌「Luca」は、子育て世代を読者としながら、子ども服に特化した誌面づくりが特徴のキッズファッション誌。神戸を編集拠点に、いわゆる百貨店ブランドとは異なる新しいブランドを紹介しようとしている。編集部があるビルの一室を訪ねた。

「ママ雑誌のように、化粧品やママのための情報を紹介するのではなく、純粋に子どもの服を紹介する親子の情報誌をつくりたかった」と、創刊の動機を語る磯本さん。以前勤めていた雑誌社で、子ども服を扱う雑誌に携わったのがきっかけで、キッズファッションの面白さに目覚め、独立して新雑誌を立ち上げた。「子供服は、ブランド数が多くて、特に大阪とか神戸に多い。いろんなベクトルで展開しているのが面白いところ。オーガニックへのこだわりを追求したり、親子のサイズがあって親子一緒に楽しめたり。Lucaでは、旧態依然としていない、新しいブランドを紹介していきたい」とコンセプトを語る。

「パパやママのための情報は載せたくない」という強いこだわりから、誌面に登場するのは、今どきの服に身を包んだ読者モデルの子どもたち。いわゆる育児雑誌のように、ママタレントやパパタレントが登場することは一切なく、ママ・パパ向けの情報も全くない。徹底して子ども服の紹介に終始しているため、ある意味、男女関係なく読める雑誌が出来上がっている。「男性の読者も多い」という子育て世代向けの雑誌としては珍しい傾向も、そんなところに理由があるのかもしれない。



子ども服を通して見えてきた親子像については「ファッションに触れるのが低年齢化していること」そして「子どもの将来の夢の多様化」を挙げる。「昔でいうと、スポーツする子を親が一緒に頑張っていたように、ダンサーやアイドルになりたいという子どもの夢に寄り添って頑張る親子がいる。雑誌でファッションショーを企画することがあるが、そういう場で頑張る親子の姿に触れると、応援したい気持ちになる」という。

創刊から1年余り。部数は3万部。小規模ながら、じわじわ部数も伸び、取り扱うブランド数も増えてきているという。「いわゆる百貨店ブランドは扱わないので、ライバル誌と呼べるような雑誌もない」という〝独自路線〟。

「ファッションの魅力を伝える表現方法として、僕は雑誌しか知らないので」という理由から、ウエブに重点を置くつもりはない。

「創刊から手弁当でやっているので、正直、そんなにバカ売れするとも思ってない。クラスに何人かの親子が読んでくれて、そこから広がってくれればというスタンスでやっていきたい」「それと、雑誌だけでなく、ファッションショーや小規模なイベント、ワークショップを企画して、ファッションを通じて、親子がコミュニケートできる場を増やしていきたいという思いもある」とあくまで謙虚に、そして実直に抱負を語った。

こんなのありかも

「こんな育児雑誌が読みたい」。WAVE PRESS編集スタッフで架空の育児雑誌を考えてみました。目次のみですが、編集会議の様子とともにどうぞ。

Ta　「子育てしていると、自分のしたいことができなくなる」

To　「パチンコ中に子どもを車内に置き去りにして悲劇が起こる。でもパチンコしたいという気持ちは否定できない。根っこは同じでは」

⇒特集①「子育て中だってパチンコしたい」

託児付きの居酒屋、子どもが遊べる競馬場など、大人の娯楽と子育ての両立、我慢しなくていい方法について考える。

Sa　「スマホが欲しいと言われるのが悩み」

Ma　「ゲーム機も同じ。ただ、だめというだけでは難しい」

U　「昔はスケートや映画は『不良のやること』と怒られた」

To　「その『そんなん不良がやること』という一言、便利だけど今は通用しない」

⇒特集②「しつけのキメゼリフ・今昔」

昔は「不良のやること」という一言で済んだのに、今は言葉選びにも一苦労。忙しいとき、疲れているとき、使える一言とは。

Sa　「子育てを悩むのではなく、失敗しても笑って話せると楽しくなる」

To　「○○しないとだめ、ばかりでしんどい。逆に育児のダメっぷりを笑えれば楽になる」

To　「近所づきあい不要の子育て術みたいな」

⇒特集③「笑って許して。わたしの子育て術」

Ta　「雑誌のコンセプトは?」

To　「子育ては無関係だと思っている人にも読んでほしい」

Sa　「不妊であったり、子どもをもたない選択をした人は?」

To　「逆に望まない妊娠もある。いまの時点で子育ては関係ないと思っていても、みんな子どもだったわけで、だれかに育てられている」

Ta　「介護の問題も同じ。これまで見過ごされてきたケアを取り上げた研究は注目に値する」

⇒特集④「サルでもわかるケアの問題」

最新の研究成果を分かりやすく共有する。

もうええわいと折り合いをつけることも情報との付き合い方の一つ

小崎恭弘さん（大阪教育大学教育学部准教授）

西宮市の男性保育士第1号で、3人の子どもが生まれた際には育休を取得するなど、男性の子育てをいち早く実践。現在は研究者として、またNPO法人ファザーリング・ジャパン*の顧問として、子育て・父親支援の発展に努める小崎さんに、子育て情報との付き合い方を中心に話を聞いた。

小崎さんが最初に育休を取得したのは、今から20年近く前だが、「当時は男性の育児という概念自体がなかった。2006年のファザーリング・ジャパン設立とともに男性の育児という概念ができて、2010年にはイクメンという言葉が流行った」と振り返る。

現在は、各自治体が父親向けに講座を開いたり、父子手帳を配布したり、父親の育児参加は順調に進んでいるようにみえるが、「実際にはイクメンは、まだまだ浸透していない」というのが小崎さんの見方だ。「データとしても、男性が育児にかかわる時間は少ない。一方で、イクメンブームが起こした課題も浮上してきている」と指摘する。

課題の一つは、時間的な制約などで育児ができないと「ダメなパパ」というレッテルを社会的に貼られるようになったこと。もう一つは、イクメンでない夫を持った妻の「ハズレ感」がとても大きいこと。「メディアの中でイクメンが先鋭的に取り上げられることで、そういう人たちばかりであるかのように思われる。実情はちがう。目の前の夫とのちがいが気になって仕方がなくなってくるのだろう」と分析する。一方で「今はイクメンじゃないと結婚できないという実情もある」という。

メディアを通しての子育て情報については、「育児雑誌は子育ての悩み解決の窓口であり、かなりの悩みは解決されるが、最大公約数の情報であって、一人ひとりに当てはまるわけではない」と注意を促す。「例えば、子どもの育ちの問題は、育児雑誌ではクリアできない。より高度な情報は、保育者や専門家に相談するべきだし、子育て支援は充実してきている。ネットの情報にはあやふやな部分もある。情報を判断する力と、直接相談できる関係性が必要だ」と呼びかける。「情報を追い始めるときりがない。全部できるわけがない。もうええわいと折り合いをつけることも情報との付き合い方の一つ」とした上で「子どもをしっかり見ることが大切。メディアの情報は子どもを見ていない。子どもと、自分と、情報と、一番いいバランスのところが、その人の子育てなのでは」とアドバイスしている。

※ファザーリング・ジャパン：父親支援事業による「Fathering」の理解・浸透こそが「笑っている父親」を増やし、働き方の見直し、企業の意識改革、社会不安の解消、次世代の育成に繋がり、日本社会に大きな変革をもたらすことを目的に事業展開していく、ソーシャル・ビジネス・プロジェクト。（HPより抜粋）